

私立探偵 K-FILE

人探し(2) case#4

東京、ニューヨーク、ロサンゼルスでの
経験した出来事を赤裸々に語る新連載！
私立探偵ケンジの実話体験「調査日誌」

人探しは最近急増している依頼の一つである。

人探しと一口に言ってもその内容は様々であり、旧友や恩師の連絡先調査から海外で行方不明になってしまった留學生の調査、また日本の不動産の所有者や相続人が移住して物件を処分出来ないのを探し出してほしいといったものもある。ちなみに記事としては提供出来ないが、見つけ出した日本人留學生が犯罪に巻き込まれており、家族にも連絡出来ずに腐敗した生活を送っているケースも珍しくない。拉致・暴行、レイプ、麻薬漬けにされて売られるという映画のような話も実際に存在する。留学中の方々にはくれぐれも注意して頂きたい。

【プロフィール】

ケンジ yamakenusa@aol.com
神奈川県出身。ニューヘイブン大学、
大学院上級捜査コース修了。日本の
危機管理会社で探偵・ボディガード
下業務に従事した後、本場の技術を
学ぶために渡米。ニューヨークの探
偵社にて経験を積む。その後カリフ
ルニアに移り、私立探偵ライセンス
取得。現在はLAを拠点に調査業
を展開中。



旧友探しと違い、意図的に居所を隠している債務者を探し出すのは至難の業である。債務者調査はよく“狩り”に例えられる。特にベテラン債務者ともなると経験上我々の調査手法を良く心得ており、こちらが思わず感心してしまう程の見事な“技”を駆使して逃げ切ろうとする。しかしながら、実際彼らの精神的負担は極めて大きく、悲惨な結果に終わることも多い。

私は日本である金融会社の専属調査員として働いていたことがある。その中で最も印象に残っているのが債務者Y氏。彼は千葉県で小さな電器販売店を自営しており、自身と専務が保証人となり500万円の融資を受けていた。しかし不況のあおりで会社は倒産。その後Y氏の所在は4年間も不明であった。

調査を開始した私はまずは対象者の住民票を確認した。こういった債務者が住民票を新しい住所地に移していることはまずあり得ない。

しかしY氏の住民票を見て私は驚いた。彼はわずか1年の間に住民票を北海道から沖縄まで8回も移動し、さらに名前も変更していた。念のため全ての住所地を調査したが、Y氏が居住していた事実は確認されなかった。明らかに追っ手をかく乱させるための工作である。

次にY氏の信用情報記録を確認した。これは名前と生年月日を入力すると対象者の借り入れ記録と直近住所がプリントアウトされるというものである。多重債務者は結局のところ借金に頼って生活をせざるを得ず、逃亡先でも何らかの形で金融会社へ接触を試みているものだ。しかしながらこの記録からもY氏の新たな情報は入手されなかった。実は彼はあるトリックを使っていた。このシステムでは名前がカタカナで入力される。つまり、例えば同じ佐藤英子でもサトウエイコとサトウヒデコと名前を使い分けることにより、これらは別人として記録されるのである。Y氏はこの盲点を突いて、読み方が違う別人になりすまして新たな融資を受けていた。

早速その記録に記載された住所地へ向かう。現場は神奈川県内の小さなアパート。近隣への聞き込みからも対象者が居住していたことを確認。小学校3年生の娘がいることも判ったが、既に対象者は転居した後だった。この頃の子供は近所に仲良し仲間がいるもので、親同士も家族ぐるみで付き合いが多い。私は車からグリーンの帽子、〇〇運輸と刺繍の入った作業服、そしてウエストバッグを取り出し、にわか宅配便になりすました。小さな子供が居そうな近隣の家を回って“Yさんのお荷物をお預かりしているんですが、転居先をご存知ですか”とやるわけだ。

案の定、10件目程で対象者と付き合いのあった家族からY氏の連絡先を入手することに成功した。債務者とはいえ親である。子供のためであれば多少のリスクは厭わないものだ。

Y氏は千葉県に戻っており、元の住所に程近いマンションに住んでいた。名義は妻名義であり、差し押さえを避けるための策だろう。今度は車のセールスマンになりすまして訪問する。インターホンでY氏を呼ぶとエレベーターで女性2人が目を真っ赤にして降りてきた。彼女達はY氏の姉と妻とのことである。“Yさんを、”と言うとしばらくの沈黙。そして“実は、昨日飛び降りたんです”と2人はその場に泣き伏せてしまった。

噤然とした。対象者は我々の存在すら知らないが、我々は彼らの全てを知っている。そんな対象者に対して不思議な親近感を抱くこともあり、今回もそんなケースの一つだった。“獲物”を逃した悔しさなどは程遠い、空しい感情に襲われた。我々を騙すための演技だったと期待しつつY氏の住民票を再度確認してみると既に除票となっており、そこにははっきりと「死亡」と書かれてあった。

日本では闇金融の被害が多数報告されており、債務を苦しめた自殺件数も増え続けているらしい。破産してしまえば話は簡単だが、それが出来ない事情が彼らにはある。プライドがその最たるもの。また、生粋の起業家にとって銀行取引が出来なくなる破産宣告は死亡宣告に等しいものらしい。負債を返済出来ないことは重罪と勘違いしている人が多いことも理由の一つだ。“人探しは後味が悪い”この法則は当然壊れそうもない。